令和６年３月８日

令和５年度練馬区立北大泉幼稚園　学校評価報告書

練馬区立北大泉幼稚園
園　長　　金子　洋子

１　自己評価結果

（１）　概要

① 教育活動について

[成　果]

・今年度は、５月にコロナが５類になったことを踏まえ、それまでのコロナ禍では制限や実施の見合せを余儀なくされていたことを、昨年までの経験を踏まえつつ実現していくことに尽力してきた。実態や現状を見極めながら教職員も考えを出し合い、前向きで豊かな取組の実現へとつなげていった。保護者の保育参加を積極的に取り入れ、園児数は少ないながらも人と人とがつながり合い関わり合う活気あふれる教育活動を行うことができた。特に保護者の参観・参加の機会ではより実感を伴った取組となるよう工夫をし、学級・学年通信も月１回以上発行し、昨年より始めた写真入りトピックスの掲示板への貼り出しも週２回以上行うなど、わかりやすい発信を心がけ、実際に目にすることと様々な発信情報との両面から子どもたちの様子を知ってもらえるように努めた。保護者会は内容・時間等を考慮し、保護者が参加しやすい参加したいと思ってもらえるよう尽力した。またその際、効果的にＩＣＴ機器を活用し幼稚園での教育をわかりやすく伝えることで教育活動の理解につながっていった。アンケートでは、保護者からは肯定的な評価項目が多く、その中でも半数が１００％肯定的な評価結果となったのは、上記のことの成果であると考える。その他の評価項目についても概ね達成されていると考える。

〔課　題〕

・自然とのかかわりや食への興味のところは個人差も大きく、興味・関心をもちにくい場合にはなかなか前向きに取り組むことが難しいと思っている家庭もある。
・同様にコミュニケーションや様々な活動への参加についても、特性や性格などによっては積極的な取組につながりにくいところがあり、評価がやや低かった。

［改善策］

・個々の特性や興味関心等踏まえた上で集団ならではの取組だったり、継続的な取組だったりなど工夫を凝らし、子どもたちに意識づけをしたり様々に経験を重ねたりしていけるように努めることが必要であると考える。

② 家庭・地域との連携について

［成　果］

・保護者が幼稚園での活動に参加したり関わったりする機会を増やしていき、子どもだけでなく保護者も直接体験をすることで幼稚園教育への理解を深めていってもらえるよう工夫していった。また、学年通信や園だよりでは、分かりやすく写真を取り入れ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を書き込み、幼児の学びや育ちを知ってもらうことを意識してきた。その他にも、全員の保護者が毎日見る掲示板に、その日の出来事写真の掲示することで、他学年の教育活動の様子も伝わりやすくなり理解の推進につながる取組となった。また保護者が来たくなる保護者会を目指し、ＩＣＴ機器を活用し、園だよりや学級だよりや写真掲示では載せていない未公開の写真中心のスライドショーや、園内研究で進めてきた私たちの学びについてをパワーポイントで発表するなど幼稚園の教育で大切にしていることを丁寧にわかりやすく伝える工夫に努めてきた。保護者の興味関心をとらえ、伝わりやすさを意識したことで、遊びの様子や育ちについて理解してもらうことができた。
・新入園児獲得も見据えて、未就園児保育の充実を目指し、実施時間や活動内容の工夫を重ね、

利用者の増加を図った。また毎月入園説明会を設けるなど幼稚園を知ってもらう機会作りにも努めた。これらの取組を通して、多少ではあるが、入園を決めるに至ったり、新規の利用者の獲得につながった。

［課　題］

・保育参観・参加など直接参加の機会を楽しんで好意的にとらえてくださる保護者が多く、より多くの参加の意向を示す保護者がいる一方で、就労している保護者や弟妹を連れての参加になる保護者はやや負担と感じている場合もあることから、頻度や回数も含めた内容の精選や早めに計画周知をしていくなどが必要である。子どもたちの傾向としては、大人が多いことや見られていることに対して過敏な反応を示す幼児もいるため、今までと同じような実施の仕方では難しい場面が増えてきていることからも実態に合わせた内容の検討を心がける。

・今年度は、未就園児保育の定期的に行い、毎回新たな工作コーナーを設けるなど試み、利用者の増加を図ったが、特に寒い時期は人数が集まらない日が多く、思った効果が見られなかったのは残念であった。未就園児数自体も減少していることも一因と思われる。

［改善策］

・保護者のニーズを考慮しつつも、子どもたちに過度な負担とならないよう配慮するなど、実態を考慮し新たな視点をもって保育参観・参加の在り方を考えていく。

・地域の未就園児家庭の利用が増えることが、将来の園児獲得へとつながることを目指し、回数・時間帯・内容について、近隣の未就園児保育実施機関などの情報も共有しつつよりよい実施の方法を探っていきたい。

③ 安全・安心な幼稚園にについて

［成　果］

・毎月継続的に地道に繰り返し取り組んでいることで、子どもたちが安全に過ごすために必要なことがわかって行動することができるようになっている。そのことは保護者にも伝わり、危機管理や緊急時の対応などに安心していただいているという結果につながっている。

［課　題］

・あらゆる面での老朽化で、安全面で専門業者による修理や診断が必要な個所が増えてきている。今年度はシンボルツリーであった園庭の桜の木が倒木の危機との診断を受け伐採することとなり、景観が変わってしまったのは大変残念である。建物や樹木のことは幼稚園だけでは対処できないことが多く、迅速な対応がなかなか難しいところが課題である。

［改善策］

・引き続き喫緊の問題であることを関係部署への継続して働きかけ、専門業者による修理や診断の実施に尽力していく。

根拠となる資料　別紙１－１、１－２

２　学校関係者評価

（１）　総括

［成　果］

・園の特色を生かし工夫を凝らした教育活動が展開されている中で、子どもたちが成長している様子が感じられ、どの子も笑顔で伸び伸び生き生きと安心して遊んでいる姿が微笑ましい。多様性に対応し、一人一人の子どもに寄り添い、関わりを大切に育もうと環境や援助を常に考えている教師の努力があってこその子どもたちの成長と考える。

・保護者が参加型の活動や未就園児保育など、充実していたと思う。運動会では事前申請により参加人数の制限することなく実施したことで、未就園児や小学生の参加もあり地域の活気ある幼稚園としての雰囲気が感じられた。

・園内研究の成果とも連動して人と関わりを意識した取組への理解が高い評価につながっている。挨拶など子どもたちから声をかけてくる姿が年少・年長ともに自然と見られ、人と関わる嬉しさや喜びを感じるとともに人と関わることを楽しんでいることがわかる。

・保護者によるアンケート結果のほとんどが高評価であることからも、園への信頼感・期待値の高さが感じられる。

［課　題］

・園児数の減少は、大きな課題である。様々に発信し北大泉幼稚園のよさを知ってもらうことが必要だと思う。
・北大泉幼稚園のシンボルツリーの園庭の桜がなくなったのは残念であるが、次の植樹でまた新たな幼稚園のシンボルや憩いの場などにつながればよいと思う。
・10 年以上前の園を知っている方から昔と変わってしまったという声が聞かれることもある。昔と変わらないことのアピールも大事だが、今の北大泉幼稚園のよさをもっと伝えることも必要ではないか。

［改善策］

・幼稚園を様々な方法で発信していく努力をさらに重ねていく。修了児保護者の口コミの力は大きいことから、機会をとらえて発信に活用していく。近隣に続々と家が建つことから新規の未就園児保育利用者を増やすチャンスととらえて発信に努める。
・園庭開放の拡大（時間・利用者）を図り、様々な人の利用につなげていく。

３　評価結果の公表等

自己評価及び学校関係者評価の結果概要を、年度末保護者会にて説明する。また、本報告の概要を本園ホームページに掲載する。

４　次年度の学校改善へ向けた園長の見解

（１）中期経営目標の実現に向けて

○　多様性を尊重し一人一人が伸び伸びと自己を発揮し自分の力を伸ばし共に育ち合う幼稚園
○　地域に根ざし地域を取り込む幼稚園づくりの推進
○　安全・安心な幼稚園
○　教員の資質向上と教育の参画意識の向上

多様な友達との出会いを大切にし、違いに気付く中で関わりやつながりが生まれるような幼稚園作りを目指す。そのために、一人一人の発達や育ちに応じて、環境や援助の工夫をしていくとともに、遊びの中での学びを読み取り、幼児期に育みたい資質・能力を意識しながら教育活動を展開していく。担任との信頼関係を基盤にしながら、全教職員で丁寧に温かく全園児を理解し関わることで、一人一人が安心して、伸び伸びと力を発揮でき体験の積み重ねと援助の中で、自己肯定感を育み友達と一緒に過ごす楽しむ姿になると考える。様々な感情体験に「寄り添う」ことを基本に指導・援助の工夫をし、保護者とも共有し連携を強化していく。

「地域にある幼稚園」を意識し、地域の方の教育力を活用し、子どもたちに豊かな体験や様々な人との出会いの中での感動体験を味わい、人への親しみ、楽しさが感じられるようにしていく。また、近隣の小学校、保育園との連携の方法も工夫して、架け橋期の教育を担う立場として、幼保小の接続を見据えて研修にも積極的参加し、連携の中心を担っていけるよう努める。子育ての支援としては、幼稚園が未就園児の保護者の居場所となるような取組の実施を推進していくようにする。そして、地域の幼児教育をリードし、地域に根ざし信頼・必要とされる幼稚園となるための方策を引き続き考えていく。

保護者とも信頼関係を築き共に子育てをする共育を進めていけるように努める。保護者同士が子育ての仲間として笑顔で助け合い育ち合っていけるように支えていく。

教職員で様々な危機管理意識を高めていくために、定期的に危機管理マニュアルを確認し合い、組織としての危機管理力を高めていく。

ＩＣＴ機器の活用については、効果的な利用について模索しつつ、日常的に取り入れていけるように尽力していく。

今年度の園経営は、保護者や地域のご理解ご協力のもと、関係各部署との連携や情報収集を重ねながら行うことができた。次年度も、子ども、保護者、そして教職員の学びと育ちの充実に向けて、質の高い教育実践が行えるよう研修に努め、園長自身も学びを深め幅広く情報収集をしながら園経営を推進していく。